

表紙から



表紙の人は、市民活動団体「じゃまだふあみりい」代表の安田康司さん(29)です。

子ども会活動からまちづくり活動へ



中沼青少年キャンプ場での活動風景

「じゃまだふあみりい」は、主に東区子ども会シニアリーダー養成研修の修了生で構成されています。研修は高校二年生で修了するため、「みんなが散り散りになってしまうのはもつたない」という思いから、一九九一(平成三)年にOB団体を結成しました。団体名の由来は、修了生でキャンプをした時に付けたキャンプパーネーム(キャンプ場に集う人たちが互いに呼び合う愛称)で「キャンプ場のお邪魔虫」という意味だそうです。

会員は修了生の増加とともに増え続け、現在では「はつきりした数は分からないけれど、六十人以上はいる」という大所帯。全員が東区

出身で「東区を幸せにする」をモットーに活動しているそうです。

団体の発足以来、区内のさまざまなイベントでバンド演奏をしたり、裏方のボランティアをしたりするなど、幅広い活動を行っています。その中でも中心となるのは、中沼青少年キャンプ場でのキャンプ指導。子どもたちに、飯ごうでご飯を炊く方法を教えたり、キャンプファイアーをしたり、シーズンの夏には、ほぼ毎週活動しているそうです。

「ボランティアをしていると言つと、偉いねつてよく言われますが、そんな改まった意識でボランティアをしているわけではありません。人に喜んでもらえることが私たちにとつての大きな喜びなんです」と安田さんは、気負わず話してくれました。

「じゃまだふあみりい」は、今月号の特集(東区3ページ)で紹介している「コミュニティマーケットin東区」の、次回の幹事も務めます。

「各団体がそれぞれのブースで展示するだけでなく、ステージとマイクも使って、もっと各団体の紹介をしていきたい」と意気込みを語ってくれました。

ひすとりー

春祭りの日に突然命令が

一九四二(昭和十七)年四月十七日。この日は丘珠神社で春祭典が行われていました。そこへ突然、旧陸軍北部軍司令部の命令が下り、六十数戸の農家が丘珠小学校に集められました。幹部将校は丘珠周辺の地図を農家に示しながら、「飛行場建設のため、土地を買収するので、八月末までに立ち退くように」と一方的に告げたのです。突然の命令に農家は驚き、慌てふためきました。

肥えた畑が飛行場用地に

前年十二月、日本は太平洋戦争に突入。当時、現在の北区北二四条西六丁目付近に「札幌飛行場」がありました。旧陸軍は道内で新たな飛行場の建設を計画しました。札幌周辺で飛行場に適した平地を探し、札幌村の丘珠に広がるタマネギ畑を選定。選ばれた土地は特に豊かで農業に適していたそうです。ここには親子三代にわたつて畑をつ

現在の札幌飛行場(丘珠空港)

くり上げた農家が多く住んでいました。

第16回

空と大地 札幌飛行場(一)

くり上げた農家が多く住んでいました。

旧陸軍との交渉を進める

旧陸軍の買収は強制的な命令です。土地の所有者は宮口與作ら代表として粘り強く交渉を進めました。その結果、一反(約十アル)当たり七百五十円前後で買収することに決まりました。その価格は当時の公定価格の約二・三倍に当たります。

買収された土地は約二百五十ヘクタに及びました。土地の買収に該当した戸数は次の通りです(カッコ内はその中で立ち退いた戸数)。丘珠三十九戸(二十三戸)。烈々布(れつれつ)二十七戸(十九戸)。篠路二戸(一戸)。合計六十八戸(四十三戸)。立ち退いた農家は、一戸を除いて白石、平岸、琴似、発寒などに農地を求めていきました。戦争は激しさを増してきたので、空中における支配権を一刻も早く確保しようとして、旧陸軍は飛行場の建設を急ぎます。買収を通告した直後の五月十二日、軍は先遣隊を送つて測量を始め、直ちに土地にくいを打ち始めました。